

フェイトの手が、なのはが言葉に反して隠したままの胸の前の手をどけて、そのまま膨らみに触れる。

「あっ…」

それだけでなのはの全身に電撃が走った。

更にフェイトの手が硬めの弾力を楽しむように動く。

「あ、う…」

生まれて初めての感覚が連続してなのはを襲う。

なのはの嬌声に刺激されて、フェイトの興奮も高まり…

ピンと立った乳首に唇を寄せ、転がすように動かす。

「あ、あ、あ、フェイト…ちゃん…それきもちい…」

もう片手が、なのはのスリットに触れる。そこはもう湿り気という表現では控え目すぎるくらいになつていた。

「だ、だめ…そんなとこ触っちゃ汚いから…」

勿論、フェイトの手は止まらない。

なのはも恥ずかしくてつい拒絶の言葉は言ったものの、そこに触って欲しい事は分かっている。

ゆっくりと、フェイトの指が上下する。その度に滑り気が増していくのを感じる。

「あ、あ、あ、あう…変だよ」